



ユネスコ音楽部門創造都市浜松と楽器博物館20周年



昨年12月、浜松市はアジアで初めてユネスコの創造都市音楽部門ネットワーク加盟都市に認定されました。今回認定されたのは浜松市のほかにドイツのマンハイムとハノーヴァーです。すでに認定されている都市は、ボローニャ（イタリア）、セビリア（スペイン）、グラスゴー（イギリス）、アントワープ（ベルギー）、ブラザヴィル（コンゴ）、ボゴタ（コロンビア）の6都市なので、合計9都市になりました。各都市はそれぞれ独自に音楽を軸にして芸術、教育、産業などの各分野において創造的な活動をしていくと同時に、お互いのネットワークを活用して共同で活動していくことも求められています。

ユネスコの創造都市は音楽部門以外にも文学、映画、クラフト&フォークアート、デザイン、メディアアート、食文化があり、日本で認定されている都市は、金沢（クラフト&フォークアート）、名古屋（デザイン）、神戸（デザイン）、札幌（メディアアート）、鶴岡（食文化）です。

「音楽の都」を目指している浜松市にとっては、創造都市に認定されたことはとても嬉しいことで、これから様々な活動が展開されていくことでしょう。すでに今年12月には音楽文化の多様性をテーマとした国際会議やイベントが計画されています。その時期に

は第9回浜松国際ピアノコンクールが開催されていますから、浜松市は国際イベントでにぎわうことでしょう。それらのイベントは市内各所で開催されると思われますが、メイン会場となるのはアクトシティです。アクトシティは昨年10月に20周年を迎えました。今では全国的、世界的なイベントも数多く催され、浜松の表玄関となっています。

さらに、この楽器博物館も今年4月には開館満20周年を迎えます。1995年の4月8日に開館し、9日から一般公開が始まった、日本初の公立楽器博物館。この20年間でコレクションや活動が大変充実し、市内外、国内外から高い評価を受けるに至りました。浜松市民はもとより、全国や世界の音楽や芸術を愛する方から、たくさんの賛辞と応援をいただいています。浜松が創造都市になり、これからは日本国内にとどまらず、世界に向けて様々な情報を発信する役割も担わなければなりません。世界の楽器と音楽を平等に扱うというコンセプトを持つこの博物館の重要性は、ますます大きなものになることでしょう。まさに音楽とその文化の多様性を紹介している博物館ですから。新年度から20周年ならではの素晴らしい催しも計画しています。今年も浜松市楽器博物館を、どうぞよろしくお願いいたします。

イヴニングサロンコンサート「ビルマの豎琴～サウン・ガウ～」



日本では映画「ビルマの豎琴」で有名なミャンマー伝統のハーブ「サウン・ガウ」。見るからに美しい形のこの楽器から、珠を転がすような妙なる音が響き渡りました。演奏は東京芸術大学大学院在籍のス・ザ・ザさん。楽器博物館での演奏は3回目です。今回は歌のサン・サン・エイさんと、踊りのタン・ゾさんも加わり、ミャンマーの伝統芸術を楽しみました。

スさんは9歳の時からサウン・ガウを学び、国立文化芸術大学を卒業。子どもの時から数々のコンクールで優勝し、同大学でも教鞭を取られていました。2008年から日本に留学し、東京芸術大学大学院でこの度、めでたく博士号を取得されました。この3月にはミャンマーに帰国されます。

サンさんとタンさんも、ミャンマーのパンタヤ芸術学院で学び母国でプロとして活躍なさっていた素晴らしい芸術家で、今は日本にお住まいです。

プログラムは豎琴のソロで「タンヨー」という旋律形で演奏するエチュード、9世紀末から13世紀のパガン朝時代の古典舞踊「サンドチャイン」というミャンマー人なら誰でも知っている曲に合わせた踊りなどを披露してくださいました。最後は、映画「ビルマの豎琴」で演奏される「埴生の宿」でしっかりと終わりました。

日時：平成27年1月17日（土） 18:30～19:30
会場：楽器博物館天空ホール
出演：ス・ザ・ザ（サウン・ガウ）、タン・ゾ（舞踊）、
サン・サン・エイ（歌） 入場者：110人

2015年は未年！ミニ展示「羊と楽器の関係」を開催！



2015年は未年ということで、羊と楽器の関係のミニ展示を行いました。羊はおとなしい性格で、様々な環境に適応しやすいので、8000年ほど前から家畜として人の生活に関わってきました。毛は衣服や毛布など、肉は食料、乳はバターやチーズの原料になります。皮はカバンなどにも使われますが、紙のように薄くなめして羊皮紙（ようひし）として古くから紙の代わりとしても使われてきました。そして、腸はソーセージを作る時に肉を詰める袋として使われ、テニスやバドミントンのラケットの網にも使われます。では、楽器にはどのように使われているのでしょうか。

現代のピアノのハンマーは、羊の毛のかたまりに10トンほどの力を加えて作ったフェルトを、木の芯

に巻きつけてできています。300年ほど前にクリストフォリが考案したピアノのハンマーには、羊皮紙を巻いて筒状にしたものを輪切りにして使っています。また、ギターやチェンバロの胴体には響孔という孔（あな）があり、この響孔に羊皮紙で作った豪華な飾りが付けられたものもあります。そして、羊などの動物の腸は弦にして使います。これを「ガット弦」といい、腸の繊維を何本かより合わせて作ります。美しい音色ですが、湿度の変化で音程が変わりやすいのが特徴です。ハーブ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、ヴァイオリン、ギターなどの弦楽器に使います。意外なところに羊の体の一部が使われているんですね。是非、博物館に実物を見にいらしてください。

子どものための楽器体験ワークショップ2015 「雅楽の楽器 ひちりきを吹こう」



箏篳（ひちりき）奏者の中村仁美さんを講師にお迎えし、子どものための楽器体験ワークショップ「雅楽の楽器 ひちりきを吹こう」を開催しました。箏篳は日本の雅楽に使われる管楽器です。雅楽は千年以上前に日本へ伝わり、箏篳は旋律を演奏します。

今回は、小学校の音楽の授業で扱われることの多い「越天楽」の演奏に挑戦しました。先生がお手本として「越天楽」を演奏すると、子どもたちは箏篳の音を聴くのが初めてだった様で、小学校で使うリコーダーよりも小さな楽器から想像できないほどの大きな音ができることに驚いていました。箏篳の本体は竹できていて、長さは18cmと小さいですが、本体に対して芦舌（ろぜつ）と呼ばれるリードの部分が6cmとかなり大きいのが特徴です。このアンバランスな大きさによって、豊かな音量を出すことができるのです。

さて、雅楽の曲は、音を文字や記号で書き表した楽譜と、それを歌う唱歌（しょうが）で伝えられてきました。まずはじめに、手で拍をとりながら旋律を唱歌で教えていただきました。声に出して歌うことで曲の流れや息の取り方を理解したり、暗譜をするのに役立ちます。箏篳の音は、人間の声を表しているともいわれていて、唱歌で旋律を歌うときも箏篳を吹くような気持ちで臨むことが大切です。

子どもたちは歌詞の覚えがとても早く、先生の歌い方を上手に真似ていました。

次に芦舌だけを使って音を出しました。箏篳の芦舌は、葦を2枚重ね合わせたもので、乾燥していると上手く鳴りません。よく鳴らすには芦舌を少し湿らせることが重要で、日本茶に浸すとよく鳴るそうです。そして、くわえる位置や、力の入れ具合、顔の角度によって音の高さが変わります。実際に芦舌を楽器本体につけて演奏をする時は、思いきり吹くのが大切で、子どもたちはこの「思いきり」が良く、最後の合奏では、気合のはいった「越天楽」を演奏することが出来ました。芦舌はすべて中村さんが作ったもので、帰りには子どもたちにお土産として持ち帰ってもらいました。

また、雅楽で使用される箏篳以外の笙、竜笛も1人ずつ体験をすることができました。雅楽の中で「笙・箏篳・竜笛」は三管と呼ばれていて、それぞれ「天・地・空」の音に例えられ、合奏することで宇宙を作ることができると考えられています。

あまりなじみのない和楽器を体験することで、日本の良き文化を感じる貴重な経験ができました。



竜笛

笙

日時：1月24日（土） 13:30～15:00
会場：アクトシティ浜松 研修交流センター
講師：中村仁美 参加者：7人

日本の魅力再発見!! 日本の雅楽 その① ～雅楽とは～



4月に当館は開館満20年を迎えます。今年のレクチャーコンサートは日本の伝統音楽が予定されています。今号から日本の雅楽について紹介していきます。

雅楽は日本の伝統芸能の1つで、千年以上の歴史を持つ日本最古の音楽です。宮廷音楽として宮中の儀式や行事で演じられているほか、神社の祭式や仏教儀礼に取り入れられ、伝統的に演奏されている神社やお寺もあります。宮内庁の「式部職楽部(しきぶしよくがくぶ)」が有名ですが、ほかにも神社の伝統を受け継ぐ演奏団体などが日本各地にあります。

演奏形態は様々です。楽器のみの合奏である「管絃」と、楽器演奏に合わせて舞人が舞う「舞楽」、そして雅楽で使う楽器を伴奏にした雅楽歌謡や日本古来の「国歌歌舞」。これらを総称して雅楽と呼んだり、管絃と舞楽のことだけを指して雅楽と呼ぶこともあります。

雅楽のルーツがアジアにあることはご存知でしょうか。今からさかのぼること1400年前、飛鳥時代から奈良時代にかけての日本は、大陸から進んだ文化を積極的に取り入れていました。音楽・芸能の分野も例外ではなく、国際色豊かな都市だった平城京には、朝鮮半島の「新羅楽」「百濟楽」「高句麗楽」、唐の「唐楽」、そのほか「渤海楽」「林邑楽」など、様々な芸能が伝わっていました。奈良時代の一大イベント、752年の大仏開眼供養会では、日本古来の音楽だけでなく、

大陸の多様な音楽が盛大に演じられています。

平安時代になり文化の輸入時代が終わると、これらのおびただしい数の音楽が100年以上かけての楽制改革によって日本人の好みに合うように統合・整理されました。こうしてできたのが日本独自の「雅楽」です。舞楽を観ると、雅楽がアジアの香りを残しながら、見事に和風化されているのを感じることができます。なお、楽制改革では楽器の編成についても見直され、日本的趣向に合わない楽器や音質・音域が重複する楽器が廃されました。正倉院には、23種100点余りの奈良時代に使われていた楽器が残っており、このなかに廃止された楽器を見ることができます。

雅楽は平安時代以後、伝承の危機もありましたが、千年以上もの間、当時の曲や舞、楽器をほぼ同じ姿で今日まで伝えていています。このような音楽は世界でも珍しく、雅楽は「現存する世界最古のオーケストラ」とも例えられ、ユネスコの世界無形遺産にも登録されています。日本に音楽や楽器を伝えた中国や朝鮮半島の音楽のほうがもっと古いのでは、と思われるかもしれませんが、大陸の国々では千年の間に音楽が途絶えたり形を変えたりしたため、当時の楽器も失われたものがほとんどです。昔とほぼ変わらない楽器とその音楽を伝えている日本の雅楽は、当時の大陸の音楽を知る上でも大変貴重なものとなっています。

博物館日誌

- 1/17(土) イブニングサロンコンサート
「ビルマの豎琴～サウン・ガウ～」 18:30 天空ホール
出演：ス・ザ・ザ、タン・ゾ、サン・サン・エイ 入場者：110人
- 1/21(水)～22(木) 移動楽器博物館 浜松市立西気賀小学校
- 1/24(土) 子ども楽器体験ワークショップ「雅楽の楽器ひちりきを吹こう」
13:30 研修交流センター 講師：中村仁美 参加者：7人
- 2/1(土) 子どものための楽器体験ワークショップ
「バンジョーをひこう！」
13:30 研修交流センター 講師：原さとし 参加者：15人

浜松市楽器博物館だより

平成27年2月1日発行 No.97

編集 浜松市楽器博物館

〒430-7790 浜松市中区中央3-9-1

TEL 053-451-1128 FAX 053-451-1129

URL <http://www.gakkihaku.jp/>

これからの催し物

- 展示室ガイドツアー 毎日曜日 展示品の解説
※催し物により変更もあります
- ギャラリートーク 毎日数回
展示品の解説を行います
- レクチャーコンサート
「冬の旅～フォルテピアノで贈るシューベルトティアード～」
3/11(水) 19:00 天空ホール 主演：平井千絵、近野賢一
「時代を彩るオーボエたち～16世紀から21世紀へ～」
3/25(水) 19:00 天空ホール 主演：三宮正満、水永牧子
- 講座
フォルテピアノのその時代！「プロローグ：シューベルトの夢」
3/4(水) 19:00 展示室 講師：筒井はる香
- 子どものための楽器体験ワークショップ
「ポルトガルのタンバリン“アデューフェ”を作って演奏しよう！」
2/14(土) 13:30 研修交流センター 講師：田島隆
- ミュージアムサロン 14:00&15:30 (天空ホール)
3/21(土)「フルート音楽の魅力～麗しき旋律～」
出演：鈴木末希香、当館職員